

# 教育思想史学会

## 第14回大会コロキウム概要

2004年9月19日(日)  
10:00~11:45  
日本大学文理学部  
百周年記念館内会議室

教育思想史学会

History of Educational Thought Society

〒214-8565 神奈川県川崎市多摩区西生田 1-1-1

日本女子大学人間社会学部教育学科内

TEL: 044-952-6873

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/hets/>

E-mail: [hets@fc.jwu.ac.jp](mailto:hets@fc.jwu.ac.jp)

〔路線案内図〕



\*新宿からは、京王線（各駅停車／快速）に乗車、「下高井戸」まで10分です。

\*「下高井戸」駅には、各駅停車と快速のみが停車します。特急、準特急、急行、通勤快速は通過しますのでご注意ください。

〔日本大学文理学部周辺地図〕



\*京王線・東急世田谷線「下高井戸」駅から、「日大通り」を徒歩10分。

\*日大文理学部周辺には多数の飲食店が並んでおりますので、昼食の際はご利用ください。

## 他者論の行方

生命、メディア、あるいは、不在の刻印

企画：久保田健一郎(大阪大学)

報告：久保田健一郎(大阪大学)

谷村千絵(鳴門教育大学)

藤田雄飛(京都大学大学院)

森岡次郎(大阪大学大学院)

近年、教育学において、他者に関する議論が相次いでいる。それらの議論は、概して近代教育批判の文脈で行われているようだ。教育学に他者概念を導入することで、近代教育学を解体し、新たな教育学を構築することへの目論みとして位置づけることができるだろう。

しかし、果たしてこうした他者への「接近」の可能性／不可能性をめぐるディスクールは、現代の生命倫理や情報社会の最前線においてもなお、その輝きを失うことなく在り続けられるのか？ここで問題となるのは、おそらくフィクションとしての他者性であろう。とすれば、教育学における他者に関する議論は、教育を延命する装置として機能し続けていくだけと言えるのではないか？この先には教育も、教育学も崩壊する光景が私たちを待ち受けているのだろうか・・・。

## ドイツ観念論哲学の表と裏(光と影)

企画：加藤守通(東北大学)・鈴木晶子(京都大学)

報告：加藤守通(東北大学)・鈴木晶子(京都大学)

・小野文生(京都大学大学院)

コメンテーター：今井重孝(青山学院大学)

司会：田中智志(山梨学院大学)

ドイツ観念論哲学が近代における様々な思想分野と有形・無形に不可分の関係を築いてきたことはいうまでもない。教育学とりわけ教育哲学・思想史も例外ではなかった。日本でも明治以降、ドイツ観念論哲学は、講壇教育学はもちろんのこといわゆる通俗教育学にも多大の影響を与えてきた。だが、ポストモダン以降、ドイツ観念論哲学は批判の矢面に立たされ、それとともに、教育学においても今更その意義を問うことに意を用いる研究者は頗る少数派になりつつある。とはいえ、教育学という学問および教育学的思惟様式に大きく関わってきたドイツ観念論哲学をいま一度取り上げることは、今を生きる私たち研究者自身の思想形成過程と探るという自己言及的作業としても重要であろう。本コロキウムは、ドイツ観念論哲学に対して以上のような思いを共有する三名の報告者による問題提起である。「ドイツ観念論哲学と教育学」という主題が、教育哲学にとって今だからこそホットな研究主題となりうる可能性について論じてみたいと考えている。

## スクールとしてのホーム

／ホームとしてのスクール

企画：生田久美子(東北大学)

報告：村田美穂(立正大学非常勤)

下村一彦(山形短期大学)

尾崎博美(東北大学大学院)

コメンテーター：宮寺晃夫(筑波大学)

司会：生田久美子(東北大学)

医療、看護、介護の領域のみならず教育学の領域においても、「ケア」概念に向けた関心が増大している現在、当の概念の明晰化を図ることは、教育哲学、教育思想研究に携わる者の責務である。本コロキウムでは、「スクール(学校)」と「ホーム(家庭)」概念をめぐる教育言説に焦点をあてて、「ケア」概念の教育における意義および位置づけについて議論する。計画は次の通りである。下村は、学校における教員主導の一斉授業や競争的な雰囲気批判し、「ホームスクール」運動を推進させたジョン・ホルトによる「ホーム」概念をめぐる議論 スクールとしてのホームへの注目 について考察する。村田と尾崎は、ともに教育哲学者として教育における「ホーム」概念の再解釈 ホームとしてのスクールへの注目を試みているネル・ノディングスとジェイン・ローランド・マーチンの議論を比較しながら考察する。